魔法先生ネギま　～新たなる夜天の王～

鉄風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま　～新たなる夜天の王～

【Ｎコード】
Ｎ１８４６Ｘ

【作者名】
鉄風

【あらすじ】
ネギの双子の弟アンリ・スプリングフィールがある日、１冊の魔道書を手にした時。満足のいく最後を迎えたはずの『女性』の運命が、再び幸せへとむかい動き出す。※この作品は若干のアンチがあります。また、クロスオーバーを予定していますが、執筆のスピードはかなり遅いです。それでもよければ呼んでみて下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿です。今までは読むだけでしたが、書いて見たいと思い投稿してみました。
誤字・脱字が多いかと思いますが、今後、文章とともに読みやすくするよう努力していきます。
不定期になるかと思いますが、よろしければ読んで下さい

プロローグ

・・・・・・・・・主……

・・・・・・・主…

・・・主はやて

最後に泣かれてしまったな。
主には笑顔でいてもらいたかったが、それは無理な事だったな・・・・

まぁ、仕方あるまい私が消えてしまうのに、笑顔でいるほうがおかしいか？
だが、主はやてを食い殺してしまうよりはマシだ。

どうかこの先、主が幸せになることを願うしかあるまいが。

烈火の将・・・・・

風の癒し手・・・

紅の鉄騎・・

蒼き狼・

ご友人たち・・・・そして
きっと現れるであろう、新たなる祝福の風。
彼らの支えがあれば、きっと主は幸せな人生を歩んでくれることだろう・・・・

キィーーーン

なっ！！

ばかな、夜天の書が起動している？
なぜだ！？　私は消えたはずなのに！！！
と、とりあえず外へ・・・

「お姉さんはだれ？」

そこにいたのは金髪に右目が緑色で左目が青色の３歳位の男の子が私を不思議そうに見つめていた。

プロローグ（後書き）

続きは早めに出す予定です
今後もどうかお願いします。

一話　平穏な日常（前書き）

当日投稿です。
さすがにプロローグが短かった為。一話までストックしてありましたが投稿に手間取ってしまいました。申し訳ありません。

一話　平穏な日常

「おじさん、いってきまーす」

「おう、アンリ、また森のほうか？」

「うん」

「体には特に注意するんだぞ」

「はーい」

僕は返事をして森のほうへ歩いていく。

「まったく、おじさんも心配しすぎだよ！」

（それは、仕方ないでしょう。実際、あなたは身体が弱いのだから）

（もぅ、僕は大丈夫だよリインフォース）

（しかし、また風邪でも引いてしまったら）

（だって、リインフォースが僕のことちゃんと見てくれてるからね）

（・・・それは、私があなたの体調を見ておけと言う事ですか）

（うん。信用してるよ、リインフォース）

（／／／／分かりました／／／／）

どうやら、リインフォースは照れているみたいだ。
そういえば、リインフォースと出会ってからもう、1ヶ月以上たつんだなぁ。

リインフォースとの出会いは、僕が森で遊んでいた時の事だった。
僕はそこで1冊の本を見付けた。そして、その本を開いてみると急に本が光だしたかと思ったら、半透明の女性が現れた。
その後、現れた女性の名がリインフォースであることを知った。

リインフォースがいうには自分はこの本（名を夜天の書というらしい）の管制人格という存在だということや、最後に日本にいたということや、今の夜天の書が自分の記録にあるものと、少し違うということを語ってくれた。

そして今、リインフォースは僕の友達兼魔法の先生をしている。

「ピラクテ　ビギ・ナル　火よ灯れ（アールデスカット）」

僕がそう唱えると練習用の杖から火が灯った。

（どうやら、この魔法はもう完璧に扱えるようですね）

リインフォースは僕の隣でそう言ってくれた。

「うん。がんばったからね！」

今、僕たちは森の中で魔法の練習をしている。
リインフォースには表に出てもらって教わっている。まあ、表に出

ているとは言っても、立体映像のようなもので、
触れないし、声が出るものでもない。
会話は普段の時と同じで思念通話を使用しているので、表に出なくてもいいのだがそこはやはり気分の問題だ。
やっぱり、教わる方としては頭の中だけで何か言われるより、隣にいて身振り手振りがあるほうがいい。

（さて、次はどんな魔法を覚えますか？）

「傷を治してあげられる魔法がいい！」

（治癒系の魔法ですか？）

「うん」

（なぜ治癒の魔法を覚えたいのですか？）

「怪我をした動物さんたちを治してあげたいから」

（・・・・そうですか）

僕が答えると、何故かリインフォースは少し間を空けてからそう言った。
何か変だったのかな？

（アンリ、治癒系は少々難しいので、先に防御魔法を覚えましょう）

「防御？」

（はい！これを覚えられれば動物たちを外敵から守れますよ）

「がいてきて、言うのは良く分からないけど、動物さんたちを守れるんだったら覚えるよ」

（よろしい、それでは呪文を教えますね）

そうして僕は、夕方まで防御魔法の練習をしてから町に戻った。

（このまま一度、家に戻ってからスタン老の所に向かいますか？）

「ううん、このまま直接スタンさんのところに行くよ」

僕はそのままスタンさん行きつけの酒場に向かった。
スタンさんは僕がこの村で、いちばん好きな人だ。
スタンさんはこの村の古株で、父さんの子供の頃のいたずら話をしてくれるのだ。

カランカラン

「いらしゃい！」

「こんばんは、スタンさんいますか？」

僕が店に入るとマスターが挨拶してくれたので、返事を返してからスタンさんがいるか聞いてみた。

「おう！アンリ」

「アンリ・・・」

「アンリ！！」

そうすると、スタンさんが声をかけてくれたのは良かったけど、予想外の人も声を出していた。

「おじさん、僕、先に帰る」

「おい！ネギ！！」

兄さんはそう言うと、出入り口のほうへ走っていった。

カランカラン

「すまんな、アンリ」

「気にしてないよ、おじさん」

「そうか・・・勘定をいておくよマスター」

そう言うと、おじさんは兄さんを追いかけていった。

カランカラン

「ネギは相変わらずか」

「うん、スタンさん」

（アンリ・・・）

僕と兄さんは仲が悪い。
正確に言うなら、兄さんが僕を嫌っている。
原因は父さんに対する、僕と兄さんの考え方の違いだった。
兄さんは父さんのことが、とても好きだし憧れてもいる。
それはとても強く、村の人がいたずらと言っている兄さんの無茶な行動も、父さんに会いたいからだと思っている。
一方、僕のほうは。

「スタンさん、また、父さんの子供の頃の話、聞かせて」

「おう、あれはナギの奴が5歳の頃に・・・・」

こう言う、父さんがバカをした話を聞くのが大好きだった。
何故かと言うと、父さんも僕らと同じ人間なんだなと思えるからだ。
村の人たちは父さんの事を、英雄扱いして人間味がないし、兄さんにいたっては物語の―主人公≪ヒーロー≫扱いで、父さんのことを人間として見ているのか良く分からない。

「・・・とゆうわけなんじゃ」

「へー、父さんそんな事したんだ」

「ああ、まったくいい迷惑じゃったわい！」

「ごめんね、スタンさん」

「あ、いや、別にアンリが謝る必要はないぞ」

「でも、父さんが迷惑かけたから・・・」

「・・・まあ、そう思うならナギのようにバカな事をしないでくれればいいわい」

「うん！」

しばらくしてから、僕はスタンさんと一緒に、スタンさんの家まで帰っていった。

何故かと言うと、店にいる最中におじさんから連絡があり、兄さんの機嫌がまだ悪いらしくもう少し時間を置いたほうがいいとの事だった。

僕と兄さんは同じ家で暮らしているが、仲が悪くなった頃から兄さんが僕を避けるようになった。

朝の挨拶をしても返事がなく、食事をしてても会話がなく、ひどい時には夜遅くまで家にも帰ってこない時があった。

これで、どこかの家にいるのであればまだいいのだが、兄さんの場合、野宿しようとするのだ。まあ、まだ一回も一晩明かしたことがないのだが。

そう言った事があり、兄さんが野宿するぐらいなら僕がどこかの家に泊まった方がいいと言う事で、僕はよくスタンさんの家に泊まったいるのだ。

（しかし、何故あなたが家を出て行かなければならないのでしょう！！）

（しょうがないよ、リインフォース）

（何がですか、ネギが野宿などせず何処かに泊まればいいのではな

いですか）

僕はリインフォースの言葉を聞いて苦笑した。
まあ、確かに兄さんが何処かの家に泊まればいいのだが、兄さんは何故か野宿しようとする。
村の人たちは『さすが、ナギの息子だな』と言っているが、僕には何故兄さんが野宿しようとするのかが何となく分かったいる。

（兄さんはピンチになれば父さんが帰ってくると思っているんだよ）

（しかし、あなた達の父親は・・・）

（兄さんはまだ、死ぬということが理解できないんだよ）

（・・・・・）

僕達の年で死を理解するにはまだ早すぎる。僕はリインフォースと森の動物さんたちのおかげで死を理解することができたのだ。
その後、リインフォースは何も言わなくなっり、僕はスタンさんの家に着きそのまま寝床に着いた。

「のう、アンリ」

「何、スタンさん」

「ナギの事が嫌いと言うのは本当か？」

「・・・・兄さんから聞いたの？」

「ああ・・・」

僕と兄さんの仲が悪くなったのは僕が兄さんに『父さんのことは好きじゃない』と言った事がきっかけだった。

「嫌ってはいないよ」

「そうか・・・・」

「でも。好きでもない」

「！！・・・そうか」

「・・・ぼくはまだ、父さんの事を良く知らないから好きか嫌いかよく分からないんだ」

「そうか・・・・・・すまなかったな、おやすみ」

「おやすみなさい」

スタンさんは安心した様子で、僕にあいさすをしてくれた。
そう、兄さんは僕が父さんの事を嫌いだと勘違いしているのだ。

（いつか誤解を解きたいね？）

（大丈夫ですよ、ネギがもう少し成長すれば分かってもらえますよ）

（そうだね）

僕は安心して眠りに付いた。

一話　平穏な日常（後書き）

ストックはここまでです。
これからは書いては投稿の繰り返しです。

二話　突然の襲撃

ゴオオオオオ・・・・・・・

「これっていったい・・・・」

（村が襲撃されている！？）

「襲撃って・・・・」

僕はいつもの通り、森で魔法の練習をしていたが、今日はネアカお姉ちゃんが来る日だったので、練習を早めに切り上げ村へと帰っていった。

そして、村の入口を抜けた時、さまざまな声とともに村が燃え上がった。

「そうだ！ネアカお姉ちゃん！！」

僕は今、この村にいるであろうネアカお姉ちゃんの事が気になり、村の中に踏み出そうとした時。

（待ちなさい！！アンリ！！！）

「何！リインフォース！！」

（逃げるのです！）

「でも！！」

（あなたに何ができると言うのです！！！！）

僕は体が硬直した。

（あなたは子供なんですよ。その上、力もなければ身体も弱い。頼みの魔法も初心者用のが一通りと多少の防御魔法のみで、治癒魔法はまだ使えない。そんなあなたが、このまま飛び込んだ所で足手まといにしかなりません。そればかりか、敵に捕まれば人質にされ、村の人の邪魔になるだけですよ）

僕はリインフォースの言葉を、歯を食いしばり、泣きながら聞いていた。

（今あなたにできることは逃げることです）

「・・・・・」

（無事に逃げて、外に助けを呼ぶだけです）

「ヒック・・・助け・・？」

（そうです。おそらくここからの連絡は無理でしょう。ならば、連絡可能な所まで行きそこから・・・・そう！あなたの祖父であるメルディアナ魔法学校校長に助けを求めましょう）

「でも・・・連絡先が・・・」

（大丈夫です。私が教えます）

「リインフォース。うん！わかった！！」

僕は涙を拭きながらそう言った。そして、助けを呼びに村の外に振り向こうした時。

（アンリ！前に走って！！）

「えっ！？」

（早く！！！）

リインフォースの声に反射的に足が前に出ていた。

ドカッッン！！

「うわっ！！」

突然の爆音とともに、背中に衝撃を受けて僕は倒れてしまった。

「いてて・・」

僕は身体を起こしながら後ろを振り返った。そこには、ついさっきまで僕が立っていたであろう所の地面に穴が開いていた。

「なっ！何あれ！？」

（アンリ、立てますか！？）

「えっ！？あ、うん」

（では、村の中でもいいのですぐに逃げてください！）

僕はリインフォースに言われて、身体を起こしながら慌てて逃げ出した。
そして、脇道に入り込んだ時、穴が開いた方に目を向けた。見えたのは一瞬だったが、僕は驚きとともに逃げ足が速くなった。

（リインフォース！今の化け物は！？）

（私も初めて見ますが、おそらく・・・悪魔です）

それを聞いて血の気が引いた。
悪魔は人間より遥かに高い魔力と、とても優れた身体能力を持っている。また、高位の悪魔になると封印するぐらいしか、対応が出来ないと聞いている。
でも、今の状況で重要なのはその事ではなくて、むしろ・・・・

（ねぇ、通常、悪魔って・・・？）

（ええ、悪魔はこの世界にいることはほとんどありません。召喚されない限りは）

（じゃあ、やっぱりこの村に恨みを持っている誰かが・・・）

（いいえ！それは早計です。高位の悪魔は下位の悪魔を召喚することができます）

（それって・・・？）

（たまたま、高位の悪魔が気まぐれで召喚したかも知れません。たいした理由もなく）

（理由もなくって！）

（ともかく、生き残ることだけを考えて下さい）

そうだ、今はともかく助けを呼びに行くためにも生き延びないと。
悪魔が相手じゃあ、たとえ下位であっても僕には対応ができない。
ましてや、今のリインフォースは、僕との会話と姿を見せる以外何もできない。
きっと、戦えれば悪魔であろうとリインフォースは勝てると思う。
しかし、今のリインフォースは実体化もできないし、魔法も思念通話以外使えない。
でも、僕が夜天の書の主（アンリ）っ！

（えっ！何？）

（聞いていなかったのですか。そこの道を右に曲がってください）

（ごめん・・・）

今、リインフォースが空を飛んで上からナビゲートしてもらっている。リインフォースの身体は半透明なので、遠目では見にくいし姿は一瞬で消せるから僕が見つかる可能性はかなり低い。
もちろん、見つかる危険はあるけど、何もしないで悪魔とばったり出会うよりはましだ。
でも、何とか村の外に出よう思っているけどなかなか外に出れない。

（リインフォース！次の角は？）

（ダメです。火で道が塞がっています）

（あそこもダメか・・・僕が空を飛べたら火を飛び越えるのになぁ？）

（仕方ありません。箒を使っての飛行などは、あなたにはまだ早いですから）

さっきまでは、リインフォースや村の人が空を飛んでいるところを見ても、羨ましいとは思わなっかたが今の状況では心底、空が飛べるみんなが羨ましいと思った。
ここから助かったら、箒の飛行だけじゃなく浮遊術も覚えよう。

（アンリ！左手のほうに人がいます）

（本当！）

（ええ、見たところ村の人のようです）

（合流しよう！）

（何故です？）

（助けてもらうためだよ）

（それはいったい？）

（いるのは村の人なんでしょ。なら飛行の魔法が使えるはず）

（なるほど、確かに空が飛べればこの状況を打破できますね）

（うん、今のままじゃどうにもないからね。いい、リインフォース）

（ええ、多少、不自由になりますが、消して悪い手でもありません）

（じゃあ、行くよ！リインフォース）

そう言うと、その人に会いに行った。

二話　突然の襲撃（後書き）

次回も襲撃事件の話です。

三話　脱出への説得（前書き）

1ヶ月以上も更新できずにすいません
遅れた理由しては、この度、転職しました。
その関係で手続きがあったり、新しい仕事に慣れるために、執筆の時間が取れずにいました。
こういった理由から遅れてしまいました。

三話　脱出への説得

「アンリ君！無事だったの！？」

「おばさんも無事でよかったよ」

リインフォースが発見したという人の所まで行くと、そこにはココロウァおばさんがいた。
彼女は僕の幼なじみアーニャこと、アンナ・ユーリエウナ・ココロウァの母親だ。僕はおばさん又は、ココロウァおばさんと呼んでいる。
でも、ここで逢えたのがおばさんで良かった。
僕は村の中では、スタンさんとおじさんぐらいしか親しい人がいない。それ以外の人からは微妙に避けれているし、僕のほうは距離を置いている。
何故、村の人に避けられているかというと、兄さんとの確執が主な原因になっている。
兄さんはあからさまに僕を避けるため、当然その原因が気になるので、みんな兄さんに理由を聞いてしまい、僕が父さんのことが嫌いだと思ってしまったのだ。
無論、僕に避ける理由を聞いてくれる人や、真偽を確かめに来る人には僕の正直な気持ちを話したが、僕の気持ちを理解してくれた人はほとんどいなかった。
やはり、父さんがこの村に与えた影響はすごかった。それに、僕が父さんを好きでも嫌いでもないと言うのは、村の人は気に入らないみたいだった。
そんな中でココロウァおばさんは、僕に親しくしている数少ない人なのだ。これは、アーニャの存在のおかげである。
先ほど、親しい人は2人だけと言ったが、それはあくまで村の中だ

けのことでネアカお姉ちゃんやアーニャとも仲がいい。その為、アーニャが僕の気持ちを説明してくれたおかげで、おばさんとの仲は比較的良好だが、僕の方はある程度の距離を取って接している。

「おばさん！この村に何が起きたの？」

改めておばさんに今の村の状況を聞いてみた。いくら、悪魔が村を襲っていることは分かっても詳しい事は何も分からない。

「突然、召喚された下位悪魔（レッサーデーモン）の大群がこの村に攻めてきたの」

「それで召喚主は誰だったの？」

「分からないわ、かなり距離が離れた所から召喚されて送られてきたみたいなの」

「そっか・・・」

（アンリ、下位悪魔（レッサーデーモン）達がどの方角から来たのか確認して下さい）

「おばさん、悪魔たちはどこから来たの？」

「確か、あっちの森の方だったわ」

おばさんは左を向き、指を森の方に指した。

（どうやら、隣の村とは方向が違うようで安心しました）

（どう言う事？リインフォース）

（悪魔たちが襲ってきた方向に近いと、村に向かう際、召喚主に出会う可能性がありましたので）

（なるほど）

もし、リインフォースの言った通りになったら、僕たちは逃げ出すどころか敵に突っ込むところだった。

「おばさん！隣の村まで行くのを手伝って」

「隣の村まで行ってどうするの？」

「おじいちゃんに連絡を取って助けを呼びに行きたいんだ」

「アンリ君・・・分かったわ。村の外までいきましょ」

「ありがとう、おばさん」

これで助けを呼びにいける。

「でもアンリ君、そこからはあなた一人で行きなさい。私はここに残るから」

「何言ってるの！おばさん！？」

「私はこの村を守らないといけないの」

「だから、その為にも助けを「アンリ君！」えっ！」

話を遮り、おばさんが目線を僕に合わせて肩に手をかけた。

「聞いてアンリ君」

そして、おばさんは笑顔で僕に語り始めた。

「私はこの村の住人として、何より立派な魔法使いとしてこの村の危機を放っておく事ができないのよ」

「何を・・・・・」

僕は声を震わせながら呟いた。

「大丈夫よ。私たち立派な魔法使いは悪魔なんかには負けないわよ」

「だから・・・・何を言ってるんだよ！！！」

おばさんの左腕を右手で掴んで、僕はおばさんに向かって怒鳴っていた。

僕はおばさんの言葉や態度に怒っていた。そして、これが村の人と距離を取っている理由だった。

村のほとんどの人は、立派な魔法使いらしい行動をとるし、いかに立派な魔法使いが素晴らしいかを言ってくる。

僕もそれ自体は悪いことではないと思う。

しかし、いかに立派な魔法使いは素晴らしいといっても、それを嫌いな僕にいくら言い聞かせても意味がないのだ。

僕だって、立派な魔法使いの活動そのものは否定しない。実際、父さんが立派な魔法使いとして活動してきたことはとてもいいことだと思うが、その為に身近な僕たちに親なしと言う犠牲を強いるのは間違っていると思う。

でも、村の人たちは、立派な魔法使いの活動はとても素晴らしいも

のだから、そのくらい我慢しなさいと、口に出して言う人はいないがが態度を見る限りそう心の中では思っているよう見えた。
だから、僕はそういう風に考えてしまう立派な魔法使いと言う存在は好きになれなかった。
しかし、そんな僕の気持ちも分からず村の人たちは、嫌がる僕に立派な魔法使いの素晴らしさを教え込もうとしていた。
確かに人の命を助けたりするのはいいことだと思うが、それは別に立派な魔法使いでなくてもいいと思う。人助けにそんな称号はいらないはずだ。
そして、僕が決定的に立派な魔法使いを嫌いになったのは、化け物を倒すところだった。
たとえ、吸血鬼や悪魔が人に害を及ぼすからと言って、退治しに行ったりするのはどうかと思っている。
もちろん、襲われれば抵抗するし、場合によっては倒すことも仕方がないとは思う。でも、存在自体が悪い事だとは思わない。
吸血鬼は人の血を吸う為に人を襲うが、それは生きるための食事なのである意味しかたがない。
そして、悪魔は今も襲われているけどそれは召喚主が悪魔に命じているためで、悪魔たちが望んで僕たちを襲っている訳ではない。
そんな彼等を悪と決め付け、退治することが当然と思っている立派な魔法使いを好きになれず、嫌いになったのは僕にとっては当然のことだった。

「アンリ君」
（アンリ）

「僕は村を助けるために、隣町に行こうって言ってるのに、何で残るって言うんだよ！」

「だからね、アンリ君。私はこの村の住人として一人でも多くの人

を助けたいの」

「それなら、助けを呼びに行くのも同じことじゃないか！」

僕がそう言うと、おばさんは僕に顔を見せないように顔を伏せた。

そして、両手が少し震えているみたいだ。

（あっ、あのーアンリ）

若干、リインフォースが声を震わせながら声をかけてきた。

（何！）

（その、実は）

「アンリ君！」

おばさんが意を決したように、顔を上げて声をかけてきた。

「いいアンリ君よく聞いて、確かに助けを呼べればそれに越したことはないわ。でもね・・・今からじゃあ間に合わないのよ！」

それを聞いてきょっとんとした。

「今からアンリ君が隣の村まで行って助けを呼んだとしても、その助けが来るのは明日以降になってしまう。その頃には村が壊滅しているわ」

（アンリ、彼女の言うことは正しいです。すみません、あなたを助けるために騙してしまい）

「ごめんねアンリ君、この村の人たちならそこらの軍隊が相手でも早々負けないけど、今、村を襲っている悪魔達は強いし数も多い。だから、あなただけでも逃げてほしいのよ」

それを聞いて二人が勘違いしていることに気付いた。だから、間違いを正さないと。

「そんなことは分かっているよ！」

「えっ！？」

（はっ！？）

「だから、今から助けを呼んでも、村のみんなを助けられないことぐらい気付いているよ！！」

「それじゃ、いったいどうして？」

（それではいったい何故、助けを呼ぼうと？）

「たとえ、村が壊滅したとしても、村の人が全員死んじゃうとは限らないでしょ。もし、生き残った人がいたとしても、助けるのが遅れればそのまま死んでしまう。そんなことにならない為に助けを呼びに行きたいんだ」

そう、この村は魔法使いが住んでいる村のため、近い場所に人は住んでいない。その為、たとえこんな騒ぎが起こっていても、他の人がこの村の異変に気付くのは今日、明日と言うことはないだろう。

「初めは一人で行こうとしたんだ。でも、悪魔に見付って逃げているうちに、村から出られなくなって困っていたんだ。そんな時、お

ばさんに会えたんだ」

「アンリ君」

「お願い、おばさん！一緒に助けを呼びに行こう！おばさんとなら僕が一人で行くより早く助けを呼びにいけるんだ。そうすれば助けられる人が少しでもいるかもしれないんだ」

僕は頭を下げてお願いしていた。おばさんを助けるためにも、僕はここで引く訳には行かなかった。
もちろん、今言ったのが主な理由だが、それに加えておばさんを助けるためにも僕と一緒に来てほしかった。

「分かったわ、アンリ君。一緒にいきましょう」

「おばさん」

「確かにアンリ君の言う通り、今から救援を呼んでおけば、早ければ明日の朝には、遅くても明日の夜までには来るはず、それに捜索が早ければ召喚主の手懸かりが見付かるかもしれないものね」

「ははっ・・・」

僕はおばさんの返答に苦笑した。こんな時にも犯人探しを考えるなんて、相変わらず立派な魔法使いの人たちは・・・。

「それじゃあ、アンリ君。悪魔に見つかる可能性があるから、村を出るまで飛ぶのを避けた方がいいから走るわよ」

「うん。わかった」

（アンリ。私はまた索敵をおこないます）

（うん、お願いリインフォース）

「じゃあ、行こう」

そう言うと、僕たちは村の外を目指して進みだした。

三話　脱出への説得（後書き）

次話も更新が遅れるかもしれませんが、必ず、投稿します。
よければ、また次も読んで下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1846x/

魔法先生ネギま　～新たなる夜天の王～

2011年11月16日20時31分発行